哀川くんの東方戦記

駄猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
哀川くんの東方戦記

【Ｎコード】
Ｎ１６７８Ｖ

【作者名】
駄猫

【あらすじ】
さぁ・・・
何一つ完結していない内の第三作目
始まります
主人公はいつも通りの哀川拓也
対フィアンマ戦で死んでしまった拓也は大神となって幻想郷を駆けめぐる！

第一話（前書き）

さぁ・・・なにも考えずやっちゃいますよ！！

第一話

拓也視点

皆さんは天国って信じるかァ？
因みに俺は絶賛天国中だぜェ・・・

女神
「あの・・・すみませんでした！！」

拓也
「さっきからなンなンですかァ？」

女神
「あのとき『フィアンマ』に倒される筈じゃ無かったんです！！」

拓也
「あの右手ヤローか・・・」

女神
「本当は皆さんと帰られる筈だったんです！」

拓也
「ふゥン・・・まァいいぜェ・・・
俺が逝くのは天国か地獄か幻想郷か冥界か？」

女神
「幻想郷ですね」

拓也
「・・・あれ？カードじゃねェのか？」

女神
「・・・？何をいっているんですか？」

拓也
「いや・・・スマン・・・なンかよォ・・・
この状況にデジャブがよォ・・・」

女神
「？？そうですか・・・」

うむ・・・激しくデジャブだぜェ・・・
ありえねェよなァ・・・うンあり得ない・・・
だってよォ・・・コレを一回感じたことがあンなら・・・一度死ン
でンじゃン・・・
俺は今回初めて死ンだ・・・・筈・・・・だよな？

拓也
「ンで、もしかしてよォ・・・俺・・・妖怪になンのかァ？」

女神
「はい」

拓也
「即答！？」

女神
「貴方には大神になってもらいます」

拓也
「ンあ？狼？」

女神
「ええ、大神です」

拓也
「まァいいかァ・・・ンじゃあ行ってくる」

女神
「此度は本当にすみませんでした・・・
次の世界では頑張ってください！！」

拓也
「まァ・・・適当に頑張ってくるわァ・・・」

女神
「何か有ったらいつでも私を呼んでください」

拓也
「何か有ること前提なンだなァ・・・」

女神
「では行ってらっしゃいませ」

拓也
「おゥ・・・行ってくるわァ・・・」

キィィィ・・・バタン

さぁ・・・・哀川君の東方戦記

始まります

第二話

・・・さて、ついたはいいンだがよォ・・・

ココは一体どこなンですかァ！？

右を見れば・・・木木木木木木木木木木木木（ｒｙ

左を見れば・・・木木木木木木木木木木木木（ｒｙ

後ろを見ても・・木木木木木木木木木木木木（ｒｙ

前を向いても・・木木木木木木木木木木木木（ｒｙ

救いは上を見れば綺麗な星空ってとこかァ・・・

でも・・・さっきからちらちら見えてる白い獣の手は俺の手かァ？

狐みてェな手だなァ・・・おィ

っていうかよォ・・・狼じゃなくて狐じゃねェかよォ！？！！？

拓也

「コォォォォォォン！！」

―ざわ・・・ざわ・・・―

ンだァ？

蜘蛛
「ゲヒャヒャヒャ
なんかエサになりそうな狐がいるぜぇ・・・」

うわァ・・・めっさ死亡フラグ建てたバカがいるぞォ・・・
ってアレ？俺の能力が・・・
『森羅万象の向きを操る程度の能力』ってなってンだがァ・・・
森羅万象？ちょっと待て・・・
宇宙に存在するありとあらゆる事象を意味するンだぜェ？
このまま行ったらよォ・・・

フィアンマ？ナニそれ喰えンのォ？っていえるぜェ・・・

まァ・・・いいかァ・・・コイツで試そォかァ・・・

拓也

「かかってこいよォ・・・三下ァ！」

蜘蛛

「んだと！？てめぇはコロス！！」

拓也

「最初から喰うって言ってなかったかァ？

それともなンなの？バカなのォ？死ぬのォ？

あァ・・・バカだったなァ・・・てか、三下が俺に喧嘩売ってンじゃねェよォ！」

蜘蛛

「誰が三下だ！！唯の狐がぁぁぁぁぁぁぁ！！」

拓也

「よっこらせェ・・・・おォ・・・人になれたぜェ

さァてとォ・・・　悪りィが…こっから先は一方通行だァ！侵入

は禁止ってなァ！！」

蜘蛛

「んだとぉ！？」

目の前に居る取り敢えずサイズがデカイ蜘蛛が殴りかかってきた

だから俺は取り敢えず・・・

反射した

蜘蛛

「うがぁぁぁぁぁ！？！？」

拓也

「はァ・・・俺の敵やってくれよォ・・・

まァ、実験道具(モルモット)にはなンだろォ？

・・・簡単にはくたばってくれンなよォ？」

蜘蛛

「ひ、ひぃぃぃぃ！？」

―バン―

拓也

「今度は一体なンなンですかァ？」

？

「なにをしているのかしら？私の花畑で・・・」

・・・ちょっと待てェ・・・

足をスゥとあげてみた・・・

なんと・・・足のしたには・・・・・

向日葵があった・・・

でもよォ・・・コレで一つ分かったコトがあるンだ・・・

今、そばにいるのはアルティメット・サディスティック・クリーチャー・・・

花の妖怪・・・風見　幽香

だと言うことだ・・・

これは・・・・勝てねェェェェ!!

マジかァ!?マジかよォ!?マジですかァ!?

っは・・・・思わず三段活用をしちまったぜェ・・・

幽香
「生かしては返さないわよ・・・
私の大切な子たちを踏んでしまったんだからね・・・」
拓也
「・・・なら・・・テメェを倒して逃げるぜェ！！」

・・・あるェ？倒したら逃げなくてよくねェかァ？
テンパリ過ぎてミスったなァ・・・

幽香
「倒したら逃げなくてよくないかしら・・・？
まぁ、いいわ・・・アナタはココで死ぬんだから・・・」

拓也
「この状態じゃ勝てそうに・・・・あれ？
勝てるくないか？ちょっと待てェ・・・俺の能力は・・・・
『森羅万象の向きを操る程度の能力』だろォ・・・？
この勝負貰ったな・・・」

幽香
「ナニをゴチャゴチャと・・・・
さて・・・・死になさい！」

―グォン―

拓也
「よっとォ！」

幽香
「避けないでくれるかしら？」

拓也
「当たったら痛ェだろォ？なら避けるっしょォ！！」

幽香
「ッチィ！なら・・・」

本日二度目の・・・あるェ？

もしかして・・・元祖『マスタースパーク』かァ？

さすがにピチュりたくねェしよォ・・・

向こうがやる気なら・・・俺もやるっきゃねェよなァ・・・

拓也
「クコキカクカキカコキカケケキコカコ」

幽香
「（アレは使わせては駄目と本能がいってるわね・・・）

元祖『マスタースパーク』！！！」

拓也

「良いね！良いねェ！！最っ高だねェ！！！！！

なら、俺もそれ相応の技使わなくちゃなァ！！！

電離『プラズマボール』！！」

―ズガァァァン―

続く・・・

第二話（後書き）

さて、第二話投稿！！

と言うわけで・・・また次回～

第三話

拓也
「クコキカクカキカコキカケケキコカコ」

幽香
「（アレは使わせては駄目と本能がいってるわね・・・）

元祖『マスタースパーク』！！！」

拓也
「良いね！良いねェ！！最っ高だねェ！！！！

なら、俺もそれ相応の技使わなくちゃなァ！！！

電離『プラズマボール』！！」

ーズガァァァンー

今・・・立っているのは・・・

哀川拓也だった・・・

拓也
「・・・勝った？マジかァ・・・・
さて・・・と、ここら辺にコイツの家ってあンのかなァ・・・」

幽香
「・・・・何する気なの？」

拓也
「ン？喋れンのかァ？
お前運んでいこうと思ったンだがよォ・・・
余計な世話かァ？」

幽香
「いえ・・・ちょっと歩けないと思うわ・・・」

拓也
「だろォなァ・・・俺のフルパワーだったしなァ・・・」

幽香
「はぁ・・・アナタ何年生きてるのかしら？」

拓也
「俺かァ？てか俺以外いねェよなァ・・・
俺は１６年だなァ・・・と言っても妖怪になったの最近だけどなァ」

幽香
「・・・嘘でしょ？・・・・・・・・
私も落ちたモノね・・・まだ１６の妖怪にやられてしまうなんて・・・」

拓也
「とは言われてもなァ・・・・
俺は基本妖力だっけかァ？はつかわねぇしなァ・・・」

幽香
「ならどうやってスペルカード使ってるのよ・・・」

拓也
「基本は演算して使ってるし、さっきの発言はノリだったから
スペルカードは使ってねェなァ・・・後、ふんじまった向日葵は栄養が行くよォ
にしたからよォ・・・多分明日には元通りだぜェ」

幽香
「どうやったのよ！？」

拓也
「え？其処は栄養の向き《ベクトル》を変化させて、」

幽香
「べくとる？」

拓也
「あァ・・・

ベクトルってのは向きだなァ・・・簡単に言えばよォ」

幽香
「へぇ・・・そうなの・・・」

拓也
「ンで・・・家は何処だァ？」

幽香
「ココをまっすぐ行ってくれるかしら」

拓也
「オッケェ」

えーと・・・ココを真っ直ぐなァ・・・・

幽香
「ココを右で突き当たりを左よ」

拓也
「ン・・・・」

ココを・・・右でっとォ・・・ンで突き当たりは・・・・

えェ・・・・まだ1kmはあるぞォ・・・・まァ言い出しっぺおれだしなァ・・・

暇だし話振るかァ・・・

拓也
「なァ・・・・ココってどういうトコなンだァ？」

幽香
「最近来たところなのかしら？」

拓也
「おゥ！お前に会う前に蜘蛛の妖怪に会ったから実験道具（モルモット）にさせて貰った」

幽香
「たくましいわね・・・
それと、私の名前は風見　幽香よ・・・
何時までもお前じゃ嫌だしね」

拓也
「ン・・・覚えた（知ってたけどなァ）
俺は哀川　拓也だよろしく頼むぜェ
哀川って名字で呼ぶのは敵だけだから、拓也って呼んでくれ風見」

幽香
「私も幽香で良いわ・・・・
決して「ゆうかりん」なんて呼ばないでね！」

拓也
「わかったぜェ・・・ゆうかり」

―ビュオン！―

拓也
「うおっとスマンスマン・・・
ついつい苛めたくなってなァ・・・ククク」
幽香
「アナタ・・・性格悪いわね・・・」
拓也
「どっこいどっこいじゃねェかァ？」
幽香
「・・・・はぁ・・・・」
拓也
「機嫌直せよォ」
幽香
「拗ねてなんか無いわよ・・・呆れていただけ」
拓也
「なンでだァ？」
幽香
「こう見えて私は古参なのよ・・・・それも大妖怪なの・・・・
そんな私が軽く遊ばれてるって考えるとね・・・」
拓也

「それが俺クオリティ！・・・・スミマセンデシタ

おっとココかァ？」

幽香

「ええ・・・お茶ぐらい出すわよ？」

拓也

「・・・おじゃまします」

・・・そういや来たばっかでよォ・・・・俺家ねェじゃン・・・・

もゥ腹括って執事としてすませて貰うとか・・・・

ねェな（キッパリ

幽香

「紅茶で良いわよね」

拓也

「おゥ・・・はァ・・・・」

幽香
「・・・どうしたのかしら？」
拓也
「軽く自己嫌悪してたぜェ・・・
後、これからどうすっか考えてた・・・ンだがよォ・・・・・
ハァ・・・・世知辛ェ・・・・・」
幽香
「さっき来たばっかりって言ってたわよね・・・
もしかして家がないのかしら？」
拓也
「ウム！何というホームレスだってンだよォ・・・
畜生ォ・・・不幸だァ・・・・」
幽香
「そうね・・・条件つけるけどココに住むかしら？」
拓也
「・・・・・・・・・条件とはァ？」
幽香
「（かかった！）家の執事・・・・と言うよりはお手伝いをして貰うけど・・・・いいk」

拓也
「よろしくお願いします！お嬢様！！」

幽香
「決断早いわね・・・・まぁいいわ・・・
私のことは普通に幽香で良いわ」

拓也
「ン・・・あンがとよおォ！！」

幽香
「そんなに喜ぶとは思わなかったわ・・・・」

拓也
「それで、今は西暦何年なンだァ？」

幽香
「？何でそんなことをきくかは分からないけど今は・・・」

拓也
「今日は疲れたなァ・・・・しっかしまァ明治って微妙なときに来たのなァ・・・」

さて寝よう・・・

セーブセーブっとォ

――――――――――――――――――――――――

1. 新規　←

2. 新規

3. 新規

――――――――――――――――――――――

1. 第三話 ↑

2. 新規

3. 新規

――――――――――――――――――――――

よォしセーブもしたし今度こそ寝るかァ

お休み・・・ｚｚｚＺＺＺ

第三話（後書き）

夏休みはこっちとネギま！？戦記中心で更新するのです

次回もよろしくお願いします！！

第四話

―――――――――――――――――――――――

1. 第三話　↑

2. 新規

3. 新規

―――――――――――――――――――――――

ロードっとォ

さて・・・何時ぐらいだァ？・・・

ちっと、外でてみよォか

―キィィ・・・・ガチャ―

えェと・・・まだ４時位かァ・・・・

え？なンで分かるのかってェ？そりゃオマエ・・・

太陽の角度、１２時点の太陽の位置、その他諸々を演算して導き出したからに決まってン

だろォが・・・

さて・・・・と、ンじゃあ飯でも作っかァ・・・

えェと・・・何作ろうかァ・・・七草粥は・・・・駄目だなァ・・・

朝・・・パン・・・は良いンだが、小麦粉ねェしなァ・・・

やっぱ純和食の鮭、味噌汁、ご飯、漬け物でいいかなァ・・・

よし！そうしよう！

では・・・

―テクテク―

―パカ・・・スゥー・・・・―

えェェェェェェ・・・まさかの何もない・・・だとォ・・・

しょォがねェ・・・・魚でも釣ってくるかァ・・・向日葵を見るついでに

―テクテク・・・ズォン！―

急に効果音が変わったってェ？

いやァ、メンドクセェじゃン？１ｋｍも歩くのは・・・だから飛ンだンだァ

お・・・そう言えば俺の翼は黒から白に変わったンだ・・・

えェと・・・まァそこら辺の説明は・・・メンドクセェけど今するかァ・・・

まず俺の死因だな・・・

俺の死因はフィアンマと同士討ちになって出血多量・・・まァ、案外フィアンマは生きてるかもなァ

まァ、俺は格好良く死ねたと思うぜェ？

思い出すのは最後のやり取り・・・

―回想ｉｎ―

拓也

「ハァ・・・ハァ・・・俺も年貢の納め時かねェ・・・」

真っ赤に服が染まった少年・・・哀川拓也こと俺だァ・・・

優奈
「っ・・・！頼む！生きてくれ！！」

横で叫んでるヤツ・・・コイツが上条優奈・・・大切だったモノだ・・・

拓也
「ンなこと言ってもなァ・・・俺ってばさァ・・・もォ殆ど眼が見えてねェンだよ・・・

まァ・・・こンな俺でも大切なモノを最後まで持っていけたのは一重に優奈のお陰なン

だぜェ？オマエが居なかったらよォ・・・俺は多分ガキのままだったと思う・・・」

優奈
「分かった・・・分かったから！もう・・・喋らないでくれ・・・・」

拓也
「泣きそォな顔すンなよ・・・」

優奈

「・・・・一生の・・・・一生に一度のお願いだ・・・・・

死なないでくれ・・・・」

拓也

「ッハァ！ンな願いは駄目だぜェ・・・

多分もゥアイツもヤバイ筈だァ・・・なァ・・・優奈・・・

最後くらいさ・・・俺にも・・・セイギノミカタを張らせてくンねェか？」

優奈

「嫌だよ・・・拓也・・・貴方とずっと一緒に居たいよ・・・・」

拓也

「・・・・そォだな

俺も・・・・ずっと一緒に居たかった・・・

すまねェ・・・・・」

―トスッ―

拓也
「さァてと・・・最後の最後の大一番だァ・・・
失敗は許されねェぞ哀川拓也(セイギノミカタ)！やれる・・・
確かにフィアンマには一反射一もナニも通じねェ
・・・だからどうした？
俺のこの力は自分(テメエ)の大切なモンを守るために使うって決めたンだよ・・・」

フィアンマ
「っぐ・・・貴様ぁ！！」
拓也
「フィアンマ・・・・ここから先は一方通行だ・・・
とっとと元の居場所《世界》に引き返しやがれェ！！！！！」

―回想ｏｕｔ―

あの後・・・・決着がついた・・・
引き分けだったンだ・・・ンでだ、俺は白い翼に気づいたのは・・・
飛んでる最中だったな・・・フィアンマの元へ向かうときにだ・・・
と、言うわけで俺は既に白い翼が出るって訳よォ・・・
因みに
魚１５匹・・・取ったどォ！！
・・・古ィな・・・

―テクテク―

あ、そォそォ・・・向日葵はキチンと咲いてたぜェ・・・

良かったァ良かったァ・・・

・・・さっきから気になってンだけど・・・俺ストーカーされてる

っぽいなァ・・・

キモチワルイ視線を感じてるぜェ・・・もしかして・・・

スキマBB

―ズガン―

Aのよォだな・・・・

まァ、俺は一方幼女(アクセロリータ)じゃあねェンでなァ・・・・・

ストライクゾーンは結構広いぜェ・・・

拓也

「よォ・・・ストーカーさン・・・」

紫

「いつから気づいてたのかしら?」

拓也

「魚釣ってるあたりからだなァ・・・」

紫

「・・・(こんな妖怪を連れてきた覚えはないからつけていたら既に気づかれてるなんてね・・・)

こうみえても私は気配を消すのが得意なの・・・参考程度に教えてくれないかしら?」

拓也

「加齢しゅ」

―バキッ・・・ズガガガガガガガガ―

紫
「あら・・・手が滑りましたわ・・・
事故なら仕方ありませんわよね・・・死んでしまったって・・・」

拓也
「そォだなァ・・・仕方無い仕方ない・・・ンなわけあるかァ!?
危うく死ぬとこだったぞォ!?」

紫
「(!?確かにフルパワーで撃った筈・・・もしかして能力!?)
あら・・・どうやって防いだのかしら?」

拓也
「気合いだぜェ・・・・」

ククク・・・ヤベェ・・・あの妖怪の賢者が百面相してやがる・・・
コレだから人を弄くるのは止められねェ！！

紫
「・・・もういいわ・・・頭が痛くなってきたわ・・・」

拓也
「思考終了かァ？既にテメェが木原クンなら１３０回死んでるぜェ？」

紫
「木原って誰よ・・・」

拓也
「後よォ・・・素が出てるぜェ？妖怪サン」

紫
「・・・もう、アナタの前で取り繕うのは止めたわ・・・
面倒くさいコトになるだけだもの・・・」

拓也
「（ッチ・・・面白くねェ）さいですかァ・・・」

紫
「今、心の中で舌打ちしたわよね！？」

拓也
「シテマセェン・・・ンで、結局何のよォなの？」

紫
「・・・アナタは何時この幻想郷に入ってきたのかしら？」

拓也
「昨日」

紫
「どうやって？」

拓也
「神様の能力で」

紫
「はぁ・・・もういいわ・・・最後に・・・

アナタの種族と、ココでどう過ごすのか教えてもらえるかしら？」

拓也
「種族はおおかみ、ココでは幽香の執事をしながら、家を探しながら楽しむ」

紫
「幽香！？大神！？」

拓也
「知るかァ・・早く飯つくらねェと家の姫さンに殺されちまうンで

なァ

ンじゃ」

―ヴァサ！ズォン！―

紫

「（ポカーン）・・・」

拓也
「ンじゃ飯作ったら起こそォ・・・
では
テッテテテテテテ♪テッテテテテテテ♪テテテテ♪テテテテ♪テテテテ♪テテテテ♪テテテテテテ♪
ウルトラ上手に焼けましたァ！！！」

拓也
さて、おこすかァ・・・

「おはようさ・・・・ン・・・・・」

―ブハッ―

幽香
「おはよう・・・ってアナタどうしたの！？」

拓也
「服装整えてくれェ・・・」

幽香
「（ニィィ）ン・・・暑いわね・・・上脱ごうかしら・・・」

―チラ―

拓也
「まびやべでぐだざい・・・じゅっげづだりょうでじんじばう・・・
（マジ止めてください・・・出血多量でしんじまう・・・）」

幽香
「へぇ・・・こんな弱点があったの～・・・・」

拓也
「（この人マジヤベェ・・・）・・・そういうのは好きな人にやってくれェ・・・

あと、嫁入り前に肌を人にみせつけんな！！この・・・・超美人めェェェェ！！」

ーガチャンー

幽香
「・・・なんで美人って言われて嬉しかったのかしら・・・？」

1. 第三話 ↑
2. 新規
3. 新規
1. 第四話 ↑
2. 新規
3. 新規
ゆうかりんの美人！！！コンチクショー！！！

第四話（後書き）

あれ？気がつけば書けている・・・だと？

お、おそろしいっ！

では次回もよろしくです！

明日は学校休みだぁ！！パラダイスさっ！！

第五話

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

1. 第四話　↑

2. 新規

3. 新規

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

NOW　LOADING・・・

はァい・・・・前回、幽香の悪口が思いつかず、口から出た言葉が「この・・・・超美人めェェェェ！！」だった哀川拓也だァ

前回から時間は全然進ンでないぞォ？

これから朝飯だァ

幽香
「あらためておはよう」

拓也
「あ、あァ・・・（なンか直視できねェよ・・・）」

幽香
「クスクス・・・早く食べましょう？」

拓也
「そ、そォだなァ・・・

で、でだァ・・・今日は何処に行くとか決めてンのかァ？」

幽香
「そうね・・・昨日アナタが踏んだ向日葵をm」

拓也
「それはもォ見に行ったぞォ・・・ちゃンと上を向いていたぜェ」

幽香
「・・・そう・・・なら、どこかリクエストはあるかしら？」

拓也
「そうだなァ・・・」

今に博麗　霊夢が生きてンならなァ・・・博麗神社に行こうと思うンだけどなァ・・・

候補としては・・・人里、迷いの竹林、魔法の森・・・はまだ誰もいねェだろォしいいかァ

と言うことは・・・だ、人里か迷いの竹林ってコトになるなァ・・・

人里は上白沢　慧音がいンだろォけど・・・多分里を襲いに来たと勘違いするだろォしなァ・・・

ってコトは迷いの竹林だなァ・・・

ンで地名を知っていたらおかしいから医者がいる場所を聞いて

迷いの竹林と違っても・・・

まァ、ちょっとでも地理の勉強になったと言うことで良しとすっかァ

（因みに思考時間はココまでで５秒です）

拓也

「幻想郷で医者っていっかァ？」

幽香

「何で医者の居場所をしりたいのかしら？」

拓也

「ン？あァ・・・俺だけでなく誰かがケガしたときに知らなかったら面倒だろォ？

あと、薬をストックしとこうと思ってなァ・・・まァ何処も悪くはねェが・・・」

幽香

「病気では無いのね・・・よかった（ボソッ

取り敢えず分かったわ・・・なら迷いの竹林ね・・・」

よっしゃ完璧ィ！俺の頭脳は世界一ィ！！

ッハ！？ゲフンゲフン・・・さて・・・計画通りに進ンだンだが・・・

あ・・・空飛べること言ったっけか・・・？

拓也
「俺は空飛べるぜェ・・・今更だけど・・・」
幽香
「なら大丈夫ね・・・」
拓也
「ンじゃ、飯食ったらいくかァ・・・」
幽香
「分かったわ」

ー食事中ー

やっぱりスペルカードっていンのかなァ・・・？
ならどうしよォか・・・
取り敢えず数枚は決まってる
1枚目は電離『プラズマボール』・・・まァそのままプラズマだ
2枚目は善符『白き翼』・・・まァコレもそのままだァ

３枚目は悪府『黒き翼』・・・暴走状態のアレだなァ

４枚目は反射『一方通行』・・・そのまま反射だァ

５枚目は最終符『セイギノミカタ』・・・あのときの誓いだなァ・・・

・・・アレ？コンだけありゃ何とかなるかァ？

まァ・・・いいかァ

―食事終了―

拓也・幽香

「「ごちそうさまでした」」

幽香

「早速だけど行くわよ」

拓也

「（こういう時の為の執事スキル！！）

お嬢様・・・荷物をお持ちしましょうかァ？」

幽香
「クスッよろしく頼むわ」

ー移動中ー

拓也
「へェ・・・こンなトコに人里っていうのがあンのかァ・・・」
幽香
「里の守護者には会わないようにしましょう」
拓也
「なンでだァ？（やっぱ勘違いとか激しいのかァ？）」
慧音
「其処で何をしている？まさか・・・里を襲いに来たのか！？」
拓也
「おォゥ・・・ＢＡＤ　ＴＩＭＩＮＧだぜェ・・・
里なんか襲うかよォ！！」
幽香

「本当にバッドタイミングね・・・」

慧音
「ならなんで花の妖怪がいるんだ？」

拓也
「今は迷いの竹林に行く途中だったンだよォンで、幽香がなんでいるのかは・・・」

慧音・幽香
「「いるのかは？」」

―シン・・・―

拓也
「友達だからだ」

幽香
「・・・・へぇ・・・（なんでかしら？とてもイライラするわね・・・）」

慧音

「・・・まぁ良い・・・・引き留めて悪かった」

拓也
「気にするなァ・・・・この里守るためなンだろォ？
ンでさァ・・・オマエ・・・・」

慧音
「私は上白沢　慧音だ・・・慧音で良いぞ」

拓也
「ン・・・ンでさァ・・・後ろにいるスキマストーカーどうしたら
いいと思う？」

幽香
「拓也・・・先にいっといてくれるかしら？
私は・・・紫で憂さ晴らしするわ・・・」

拓也
「？ン・・・分かった・・・早く来てくれよォ」

慧音
「ふーん・・・・なるほどな・・・しかも自覚なしとはな・・・
まぁ、里ではやり合わないでくれよ？」

幽香
「分かってるわ・・・」

―ガシッ・・・ズルズルズル―

紫

「なんで私ばっかりこういう扱いなの！？」

拓也
「ン・・・ココが迷いの竹林かァ・・・・・」

妹紅
「なんかこの竹林に用があるのか？」

拓也
「あァ・・・幻想郷（ココ）の医者の居場所を知るのと、一応の常備薬を揃えるってコトが目的だぜェ」

妹紅
「ふ～ん・・・なら連れて行ってやろうか？」

拓也
「・・・ありがとォ・・・よろしく頼む」

―移動中―

拓也
「ンでアンタの名前は何ていうンだァ？

俺の名前は哀川　拓也、能力は『森羅万象の向きを操る程度の能力』だァ・・・」

妹紅
「あたしの名前は藤原　妹紅、能力は『老いる事も死ぬ事も無い程度の能力』だよ」

拓也
「不老不死かァ・・・
・・・アレ？不死の山？竹取物語？藤原　不比等？・・・？」

妹紅
「っ・・・、そうだ・・・あたしは藤原　不比等の娘だ・・・」

あれ？・・・・全然覚えてなかったぞ・・・？
まァいいかァ・・・・

拓也
「っつゥことはだァ・・・平安時代の・・・ばば1」

―ボォォォォ―

拓也
「いきなりの炎は駄目だろォが！！」

妹紅
「失礼な声が聞こえてな・・・なんていった？」

拓也
「年m」

妹紅
「不死『火の鳥　―鳳翼天翔―』」

―ズダッダダッダダダダダダ―

拓也

「反射『一方通行』！！」

―ギンギンギン―

妹紅
「なんだと・・・？」

拓也
「ふゥ・・・おもいっきしＢＡＤ　ＥＮＤ迎えそうになったしよォ・・・

アレだなァ・・・・からかうのは程々にしないとなァ・・・」

妹紅
「今の本気だったんだが・・・・」

拓也
「あ、そうなの？まァいいか・・・

早く連れて行ってくれねェかァ？時間が詰みそうなンだがァ・・・」

妹紅
「・・・・わかったよ・・・」

ー移動完了ー

拓也
「ココかァ・・・」

妹紅
「そうだよ・・・でもからかうのは止めような？コッチの精神がすり減るから」

拓也
「前向きに善処します・・・多分・・・めいびー」

妹紅
「直す気ねえなオマエ・・・」

拓也
「ねェぜ・・・もこたん」

妹紅
「せめて年上にはあだ名で呼ぶことをするな・・・」

拓也
「センクゥなァ！また会おうぜェ！もこたん！」

妹紅
「はぁ・・・バカみたいに人をからかうけど・・・・面白いヤツだったな・・・

・・・・・・・またな・・・拓也」

拓也
「すみませ～ン！！」

鈴仙
「はいはい～！ってどなたですか？」

拓也
「最近幻想郷に来たンで医者に挨拶をしようと思ってたのと、
常に揃えてる頭痛薬の薬をもらおうかなァ・・・と思ってたンだが・・・」

鈴仙
「はぁ・・・どんな薬ですか？」

拓也
「コレだぜェ」

―ロキソニン―

鈴仙
「偏頭痛持ちですか・・・分かりました

コチラでいいですか？」

拓也
「幾らだァ？」

鈴仙
「３銭です」

拓也
「あいよォ・・・コレで良いかァ？」

永琳
「お客さんかしら？」

鈴仙
「あ、師匠・・・最近ココに来たらしく・・・挨拶しに来たらしいです」

拓也
「どォも・・・これから頻繁に来るかもしれないので挨拶に来ましたァ」

―カランカラン―

幽香
「拓也・・・用事は終わったのかしら？」

拓也
「あ、あァ・・・その血は？」

幽香
「紫のスキマの返り血よ」

拓也
「さ、さいですかァ・・・」

―ズドォォォン―

拓也
「！？何事だぁ」

永琳
「うちの姫と蓬莱の人の形が殺し合いしてるのよ」

拓也
「そンなにのほほンと出来る話なのかァ！？」

幽香
「もういいじゃない・・・用事は終わったんだからかえりまｓｙ」

―ベキベキベキ―

妹紅
「ック・・・おらぁぁぁぁ」

拓也
「・・・帰るかァ・・・」

―帰宅―

幽香
「薬は買えたのよね？」

拓也
「ン・・・よし・・・飯出来たぜェ」

幽香
「分かったわ」

―食事中―

―食事終了―

幽香
「今日は私と寝て貰うわよ・・・」

拓也
「ブフォッ!?何を言っておられるンでせうかッ!?
それは駄目ですよォ!!!」

幽香

「何で敬語なのかしら・・・・・？

コレは主人命令よ・・・さもなくば追い出すわよ」

あ・・・明日の朝多分・・・

俺・・・終了のお知らせですねェ・・・・分かります・・・・

俺未だ思春期まっただ中だってのによォ・・・

――――――――――――――――――――

1. 第四話 ↑

2. 新規

3. 新規

――――――――――――――――――――

1. 第五話 ↑

2. 新規

3. 新規

――――――――――――――――――――――――――――

眠れない・・・・

なんか柔らかいのにはさまｒ・・・・あァ駄目駄目鼻血がでてきたァ・・・・

・・・・こういうときに言う言葉・・・・あ、あった・・

我が生涯に一片の悔いなしッ！！！！

あれ？死亡しちゃうの？

第五話（後書き）

明日はまた学校かぁ・・・・

はぁ・・・

では次回もよろしくです！

面倒ですね・・・

第六話

――――――――――――――――――――――

1. 第五話 ↑

2. 新規

3. 新規

――――――――――――――――――――――

NOW LOADING・・・

結局寝れなかった哀川拓也だぜェ・・・

思春期なめンなァ！！・・・やわらか～いムニムニに挟まれて出血多量で死ぬトコだったぜェ・・・

あ、それと駄猫からなンだが・・・この哀川君シリーズで歌詞っぽいのが載っているのがあったら

速攻教えてくれェ・・・さもなくば・・・運営に消されるなァ・・・

うン・・・運営にけされちまったら最後・・・（ガクブル・・・）

桜才戦記の「溶かされた恋心」以外でよろしくな・・・

溶かされた恋心はすでに編集して話しが崩れないよォに、それでいて出来るだけ

そのままの形で無断転載をしないよォに・・・頑張ったらしィぜェ？

さて・・・雑談はココまで

拓也

「幽香・・・起きてくンねェ？」

幽香

「うん・・・んん・・・」

拓也

「うン！色々ヤバイから早く起きよォかァ」

さて・・・俺こと哀川拓也は今何をしているでしょォか？

答えは・・・

ベッドからでよォともがいてる真っ最中だァ・・・

やっぱり妖怪だからか力が強いンだ・・・

え？何でベクトル変換しないのかって？

だって幽香がケガしちまうじゃねェかよォ・・・・

まァ・・・さすがに潰されそうになると使うがなァ・・・

拓也

「早く起きろォ・・・飯が作れねェ・・・」

幽香

「良いわよ・・・ココに居なさい・・・」

拓也

「起きてンじゃねェかよォ・・・はァ・・・」

うン・・・もォ眠いしねよォ・・・

ぐっすり行くことにすらァ・・・

拓也

「さいですかァ・・・なら昨日寝れなかったし寝させて貰う・・・」

幽香

「ん・・・」

―１２：００―

拓也
「ふぁあァァァ・・・久々にこんなに寝たはァ・・・・」

幽香
「すぅすぅ・・・・」

拓也
「お・・・離れたみてェだな・・・

洗濯してから、昼飯作って、デザート作って・・・ぐれェかな？」

あれだな・・・思春期関係なく俺寝れたなァ・・・

やっぱよォ・・・限界くると寝れちまうンだなァ・・・人間の欲求スゲェ・・・

人間じゃねェけどな・・・

さて・・・レッツ洗濯ってなァ・・・

―洗濯中―

拓也

「さて・・・と・・・

やっぱりさァ・・・漂白剤は使うべきだよなァ・・・

スプーンすり切り一杯・・・・」

ー料理中・・・お菓子、ご飯同時進行ー

拓也
「リンゴと・・・・ハチミツ・・・・
よし！バー〇ンドカレーにしよォ！！」

幽香
「あら・・・おはよう」

拓也
「今日の飯はバーモ〇ドカレーだぞ・・・
あとデザートはレモンの蜂蜜漬けだぜェ」

幽香
「ふぅん・・・」

拓也
「駄目だったかァ？」

幽香
「いえ・・・料理出来るのね？」

拓也
「一応大抵のスキルは持ってるぞォ？

たとえば執事スキルとかなァ・・・

（い、言えない・・・なんか格好良さそうだと思って取ったなんて・・・）」

幽香

「へぇ・・・」

―食事終了―

拓也
「ンじゃ・・・掃除してくるわァ・・・」

幽香
「よろしく頼むわ・・・私は花の世話をしてくるから」

拓也
「了解っとォ」

ー掃除開始ー

本当ならココでヘヤの間取り図って言うのを入れたいところなンだが、
駄猫が途中で断念しちまった為見せれねェンだ・・・
取り敢えず俺が普段生活しているスペースから

―移動中―

さて・・・階段を上ってきて一番手前の部屋が俺の部屋だァ・・・

因みに二階建てで二階には部屋が3つ、一階にはリビング、浴室、和室（？）、トイレだなァ

幽香も普段は二階の俺の隣の部屋で寝ている

―俺―幽―空―

「――――――――――――

「

それぞれの大きさは大体9畳くらいだなァ・・・

さて・・・まず俺の部屋から・・・と言っても殆ど何もおいてねェから特に時間はかからないンだ

さて、次は空き部屋・・・じゃなく幽香の部屋だァ・・・

ココは青少年からすると・・・鬼畜だ・・・この一言しか言えねェ・・・

たとえば・・・匂い・・・甘い匂いがするンだァ・・・

うン取り敢えず匂いを出来るだけすわないよォにしてからの掃除だぜェ・・・

空き部屋は掃除しなくて良いっつってたからしねェでおく・・・

次はトイレだな・・・

トイレは玄関のすぐ近くにある・・・

まァ、特に面白いコトもねェンで・・・飛ばすコトにする

―掃除終了―

拓也
「さて・・・もォ6時か・・・」

何故分かるかって？時計がおいてあるからだよォ・・・
あン時はついうっかりで見てなかったンだよ・・・

拓也
「さて・・・夕飯は肉じゃがに・・・」

幽香
「帰ったわよ」

拓也
「・・・早く服を着替えてきやがれェ・・・

後、誰と勝負したンだァ？オマエがそンなにかすり傷を負うのは普通の相手じゃ無いだろォ？」

幽香
「ちょっと向日葵を持って行こうとする輩が居てね・・・

其奴らがじゅう？だったかしらそれを使ってたのよ・・・それがかｓ」

拓也
「其奴らは？何処へ行ったァ？」

幽香
「人里に逃げられたｈ」

拓也
「オッケェ・・・久々の暗部っぽい仕事きたなァ・・・

と言っても自身で行くンだけどなァ・・・さて・・・殺して殺してコロスかァ・・・

ちょっと・・・セイギノミカタしてくるわァ・・・当麻じゃねェから

本当に唯の偽善使い《フォックスワード》だがなァ・・・」

幽香
「どういうコトよ？ってもう！」

―人里―

愛花
「きゃああ！」

慧音
「私の生徒から手を離せ！」

軍人A
「なら・・・俺たちの相手をしてくれるか？ぐひゃひゃ」

妹紅
「クソッ！」

慧音
「わかった！・・・・だから・・」

やっぱり・・・外来人・・・しかも団体かよォ・・・
でもなァ・・・助けられるなら助ける・・・そォ決めたしなァ・・・

拓也
「ハロォ？三下共ォ・・・
しかもキメェしよォ・・・なに？脅さないと女の一人も落とせねェのォ？ダサッ！
クヒャヒャ・・・さァて三下共ォ・・・
セイギノミカタ参上ってなァ！愉快に素敵にビビらせてやるよォ！」

妹紅
「た・・・拓也！？危ないからｓ」

―バン！！―

慧音
「拓也ッ！？」

軍人Ａ
「俺たちに逆らうからだ！！バカめッッ！！クハハハハハ」

拓也
「だァれがバカだってェ？

と、言うわけでもォ正当防衛決定だよねェ？

と言うわけで

歯ァ食いしばれ馬鹿共・・・俺の拳はちっとばっか響くぞォ！！！！」

―――――――――――――――――――――――――――

1. 第四話 ↑
2. 新規
3. 新規
1. 第五話 ↑
2. 新規
3. 新規

It's 制裁 Time!!!

第六話（後書き）

指摘より

反射『一方通行』については、縛らないと唯のチートになってしまうので、

本当の殺し合いの時以外はスペルとして使います。

アーンド歌詞無断転載より

あ、それと駄猫からなンだが・・・この哀川君シリーズで歌詞っぽいのが載っているのがあったら

速攻教えてくれェ・・・さもなくば・・・運営に消されるなァ・・・

うン・・・運営にけされちまったら最後・・・（ガクブル・・・）

桜才戦記の「溶かされた恋心」以外でよろしくな・・・

溶かされた恋心はすでに編集して話しが崩れないよォに、それでいて出来るだけ

そのままの形で無断転載をしないよォに・・・頑張ったらしィぜェ？

ですw

ではでは次回もよろしくです！

第七話

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

1. 第六話　↑

2. 新規

3. 新規

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

NOW　LOADING・・・

拓也
「ハロォ？三下共ォ・・・
しかもキメェしよォ・・・なに？脅さないと女の一人も落とせねェのォ？ダサッ！
クヒャヒャ・・・さァて三下共ォ・・・
セイギノミカタ参上ってなァ！愉快に素敵にビビらせてやるよォ！」

妹紅
「た・・・拓也!?危ないからs」

―バン!!―

慧音
「拓也ッ!?」

軍人A
「俺たちに逆らうからだ!!バカめッッ!!クハハハハハ」

拓也
「だァれがバカだってェ?

と、言うわけでもォ正当防衛決定だよねェ?

と言うわけで

歯ァ食いしばれ馬鹿共・・・俺の拳はちっとばっか響くぞォ!!!!」

軍人B
「ば、バケモノめぇええええ!!」

―パンパンパンパン―

拓也
「・・・だからァ？ねェ・・・銃なンて意味ねェの分かンだろォ・・・
・
はァ・・・もっと頭使おォぜ？
勝てる戦もかてねェし・・・・因みに俺は本気使う気ねェから・・・
・
さァ・・・かかってこいよォ！！」

妹紅
「・・・台詞が悪役だな・・・・」

慧音
「拓也・・・」

拓也
「俺はなァ・・・別にテメェらを殺そうとは思わなかったァ・・・」

このとき、軍人共の雰囲気が軽くなった

はァ・・・俺がそンな罰で許すと思うのかァ？

拓也

「だがよォ・・・テメェ達は何をしたァ？

幽香を撃った、人質をとった、慧音を脅迫した、村人を撃ち殺した・・・

コレはさァ・・・自分達(テメェ)も同じコトやられて良いってコトだよなァ・・・？」

軍人共の空気がまた緊張状態になったが関係無い・・・

拓也
「テメェ達はやってはいけねェコトをした・・・
下がれガキ共ォ！」
桐乃
「アンタこそ逃げなきゃ・・・・・！」
京介
「死んじまうぞ！！」
拓也
「ン？だいじょーぶだぜェガキ共・・・・
俺はな・・・今まで守りたいモノの為に悪党を張っていたンだがよォ
最近、それをなくしちまってなァ・・・・
やっぱ大切なモンは背負うもンじゃねェ・・・そォ思ってたンだが・・・
また背負っちまってなァ・・・
と言うわけで、俺は俺の偽善を張らせて貰うわァ・・・
さァて軍人共・・・

―ここから先は一方通行だァ・・・とっとと元の居場所に引き返しやがれェ！―」

―バサ・・・―

拓也

「さァて・・・

自分(テメェ)の魂を守る為に・・・そして何よりコイツ達を守る為に・・・

行くぜェ・・・三下共ォォォォォ！！」

妹紅視点

それは既に虐殺というモノになっていた・・・

本来なら気持ち悪い筈・・・・なんだが、美しい・・・・そう思ってしまったのだ

彼の生き方は危うい・・・それはもう誰かが支えにならなければ直ぐにつぶれてしまうだろう・・・

幽香

「拓也！まちなさ・・・どういうこと？」

妹紅

「アイツが守ってくれたんだよ」

唯その一言しか言えなかった・・・

隣にいる慧音もそのようだ・・・何より慧音からしたら恩人だ・・・

その雄姿を目に焼き付けようとしているのかもしれない・・

そして・・・・不謹慎だろう・・・

でも私は・・・

多分、彼のことが好きになったんだろう・・・

拓也視点

拓也

「早くかかって来いよォ！

こねぇのかァ・・・ならコッチかr」

幽香

「はぁ・・・待ちなさい・・・

せめて私に何をするか言ってから行きなさいよ」

拓也

「すまねェなァ・・・でも急がなかったら・・・慧音・・・襲われてたぞ？」

幽香

「へぇ・・・さすがにそれは駄目ね・・・女にする仕打ちじゃないわ」

幽香視点

私はかなり変わった・・・自分でも実感出来る程・・・

それも彼のお陰

今までならそんなの知らないわ・・・そう返していただろう・・・

人道的な心を持った

コレは彼の所為

どれもこれも・・・彼のお陰で良い方向に変わった・・・

多分一目惚れだったと思う・・・

最初は向日葵を踏まれてキレていた・・・

でもどんどん彼のことを知りたい・・・そう思っていった・・・

もう後戻りは出来ない・・・

友達だからだ・・・この言葉にイライラしたのは彼が鈍感だったから

竹林の医者と話していた彼をみてイライラしたのは・・・嫉妬した
から

全部全部拓也の所為・・・

・・・ならこれぐらいしても許されるわよね♪

拓也視点

幽香
「拓也ッ！！」

拓也
「どォしたn」

ーちゅー

幽香
「いってきなさい」

コレは・・・もォやるっきゃねェな・・・
はァ・・・随分メンドクセェモン拾ったなァ・・・俺ェ・・・
でも不思議と悪い気持ちにならねェな・・・ククッ
さて・・・早く終わらせて帰るかァ

拓也
「ンで、そこの・・・何してやがるゥ？
早くガキを離せ・・・」
軍人Z
「嫌だ！！っは！

コレでオマエもy」

拓也

「はァ・・・俺が弱くなった所で、別にオマエが強くなった訳じゃねぇだろォがよォ・・・あァ！？」

―バキ―

―後日―

桐乃
「哀川さん超クール！！」

京介
「俺もあんな漢になりたい！！」

愛花
「すごかったね哀川さん！」

瑠璃
「あの人は妖怪なのかしら？
でも天使のような羽が生えていたし・・・」

沙織
「そんなの関係ないでござるよ・・・助けてくれたのが事実ですぞ
ですな？きりりん氏」

文
「（ニヤリ）いい話題になってくれそうですね・・・」

ーツンツンー

文
「なんd・・・キャアアア
なんでアナタが此処にいるんですか！？」

拓也
「ククク・・・誰が良い話題だってェ？
良い度胸じゃねェかァ・・・電離『プラズマボール』！」

文
「ひこうにはでんきタイプは効果抜群ですから！
瀕死になっちゃいますから！後生ですから！やめてくださぁああ
あい！！」

幽香
「はぁ・・・紅茶がおいしいわね
え？今回はもう続かないわよ？」

——————————————————————

1. 第六話 ↑

2.　新規

3.　新規

―――――――――――――――――――――――

1.　第七話　↑

2.　新規

3.　新規

―――――――――――――――――――――――

文が最速って聞いてたンだけどなァ・・・今は・・・

ぐるぐる巻き

これほど残念な天狗いるのかァ？

第七話（後書き）

フラグ回収回&建設回でした！

戦闘描写出来ないなんて・・・

僕ェ・・・

ではでは次回もよろしくです！

第八話

小説本文
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
1. 第七話　↑
2. 新規
3. 新規
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

NOW　LOADING・・・

どォもどォも・・・哀川拓也だぜェ
さてさて・・・読者（テメェら）もずっと原作前じゃ面白くねェだろォ？
と言うわけでちっとキンクリさせて貰ったぜェ・・・

何処までかってェ？
明治最後の年から１３０年進ませて貰ったンだが・・・さて平成何年だァ？

答えは平成１０年だァ
駄猫誕生±１～４年だぜェ・・・まァ関係ねェが・・・
さて・・・霊夢は１１歳・・・原作を２００２年と言うことにしている
まァメタだがなァと言うわけで原作時は１５歳にしているのでそこは許容してくれェ

霊夢
「なにしてるの？拓也」

拓也
「ン？頭の中を整理してたンだよ」

霊夢
「？」

魔理沙
「何してるんだぜ？拓也に霊夢」

霊夢
「また来たわね？今度は何かしら？
すてきなお賽銭箱はアッチよ？」

魔理沙
「酷いんだぜ霊夢・・・」

拓也
「またかよォ・・・」

ただ一つ原作と違うところ・・・
それは・・・霊夢と魔理沙が俺こと哀川拓也に依存仕掛けてるってコトだなァ・・・

駄猫
（依存ちゃうのです！！テメェに恋してるのです！！）

最初は幽香と来ていたンだがよォ・・・

霊夢と魔理沙が急になつきだして、幽香の機嫌が悪くなってよォ・・・

それを慰めたら今度はアイツ達が機嫌悪くなりやがってよォ・・・

駄猫
（駄目だコイツ・・・・早く何とかしないと・・・）

霊夢
「ねぇ拓也・・・アンタ神様なのに神社にいなくて良いの？」

魔理沙
「それは思ったんだぜ」

拓也
「まァ・・・俺は半分妖怪のようなモンだからなァ・・・」

幽香
「拓也・・・迎えに来たわよ」
拓也
「ン？おォ・・・
・・・頼むからメンチのきり合いだけは止めてくれェ・・・」

胃が痛くなる・・・
何でこンなに仲が悪ィンだろォか・・・

駄猫
（・・・もぉいいですね・・・
でもこれだけは追記しておきます・・・拓也は鈍感ではありません・・・
性格がひねくr・・・ゲフンゲフン・・・
自分に好意が向くはず無いそう思っている為・・・気づきません・

・・

しかし・・・幽香の好意、まだ出ていませんが妹紅の好意、慧音の好意には気づいています・・・

っちリア充め・・・しかしまだ答えを出せていません・・・ただ・・・

自分の命より大切なモノという認識になっております

大体こんな感じです

幽香＝妹紅＝慧音＝霊夢＝魔理沙＞人里の皆＝永遠亭組≧知り合いですね・・・）

拓也
「はァ・・・人里で食材買っていくけどいいかァ？」

幽香
「ええ・・・いいわよ」

霊夢
「私も用事あるから行くわ」

魔理沙
「私も行くぜ！」

幽香
「来なくて良いわよ♪」

何故・・・こうなった・・・

右腕には幽香、左腕には霊夢、背中には魔理沙・・・

あ、そうだ！桐乃達がどうなったか言ってなかったなァ・・・

モチロン人だから死ンだ・・・ンだがァ・・・

亡霊として生きてるぜェ・・・アレ？亡霊だから死ンでンのかァ？

ンで白玉楼っつゥトコでお世話になってるらしィ・・・

そうそう！俺の原作知識・・・殆ど無くなっちまったンだよォ・・・

まァ・・・楽しめるからいいんだがな

一人里一

知恵
「にいちゃん！！」

拓也
「ン・・・元気だったかァ？」

幽香
「拓也って学校の先生が天職のようなきがするわね・・・」

霊夢
「同感ね」

魔理沙
「同じくだぜ」

失礼な・・・

俺は執事だぜェ・・・べ、別にハヤテに憧れてねェンだからなッ！！

うェ・・・ツンデレなンてキメェなァ・・・

拓也

「まず・・・・・」

―料理中―

え？今何処だってェ？

慧音宅なうだぜェ・・・因みに原作前を打ち切った理由は・・・夏

休み中に終わる気がしないから

らしィぜェ・・・

はァ・・・ガンバレよなァ・・・・駄猫・・・

拓也

「今日はポトフにしたぜェ」

妹紅

「マジで拓也は何でもできるな・・・・

私は焼き鳥専門だしな・・・・」

幽香

「私は拓也が居るからいいわ」

慧音

「早く食べよう・・・・せっかくのポトフが冷めてしまう」

霊夢

「・・・楽しみね・・・・」

魔理沙

「・・・うまそうだな・・・・」

拓也

「ンじゃ・・・・」

―パチン―

全員
「「「「「「いただきます」」」」」」

・・・あれ？まずったかァ？塩と砂糖でもミスったかァ？
いや・・・大丈夫の筈・・・多分・・・Ｍａｙ　ｂｅ・・・

霊夢
「・・・女としての威厳が」

魔理沙
「おいしいんだけど・・・・私こんなの作れないんだぜ・・・」

幽香

「やっぱりおいしいわね・・・・はぁ」

妹紅

「・・・勝てねぇ・・・・」

慧音

「・・・練習しよう・・・・もっと・・・・」

拓也

「？」

―――――――――――――――――――――

1. 第七話 ↑

2. 新規

3. 新規

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

1. 第八話 ↑

2. 新規

3. 新規

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

あれ？俺が悪いのかァ？

なンか皆黙々と食ってやがるけど・・・

マジでまずったかァ？

意外と出来る執事は今日も乙女心を知らずに生きていく・・・

そういうとこだけギャルゲの主人公みたいだな・・・

何という残念賞・・・

第八話（後書き）

キンクリです！！

取り敢えず空白の部分はいつかやるつもりです・・・多分

では！次回もよろしくお願いします！！

拓也

「多分なのかよ・・・」

うるさいのです！

ではでは～

第？話

小説本文

――――――――――――――――――――――――

1.　第八話　↑

2.　新規

3.　新規

――――――――――――――――――――――――

NOW　LOADING・・・

どォもどォも・・・哀川拓也だぜェ

今回から基本一話ごとに日が変わるぜェ

そういやさ・・・鬼巫女って強いなァ・・・

後、駄猫が合宿終わってヒャッハァになってコレを書いてるぜェ・・・

因みに、ドヤッて顔してるぜェ・・・・

まァ分からなくも無いンだがよォ・・・なンせ６０時間勉強したンだからなァ・・・

５日で・・・

さて、尺稼ぎも終わったトコで、今回の話を始めるぜェ！

１９９８年　春

ふぁあァ・・・これぞ正しく春眠暁を覚えずだなァ・・・

だってさァ・・・やばすぎる・・・眠ィ・・・

そう言えば読者(テメェ)らには説明してなかったなァ・・・

俺は大神なンだがなァ・・・

実はよォ・・・

アマテラスの様々な力を使うことが出来る筈なンだがよォ・・・

俺は、西洋の神・・・役職がゼウスっつぅ駄女神の様々な力を使うことが出来るンだよォ・・・

名前がセラフィムって名前なンだが下界では天使になってるからゼウスっていえって言われてよォ

しょうがないからゼウスって読ンでるぜェ

幽香

「眠いわね・・・ふぁあ・・・」

拓也

「そうだなァ・・・ふぁあァ・・・

コレは・・・・駄目だ・・・良し寝よォ・・・・ｚｚｚＺＺＺ」

幽香

「待ちなさい・・・眠いのは分かるから・・・

まずご飯作りなさい」

拓也

「・・・ういィ・・・・」

―ガチャガチャ・・・サアアア―

拓也

「上手に出来ましたァ・・・眠い・・・・」

幽香
「・・・言い色ね・・・・」

拓也
「眠かろうと執事であればちゃンとするだろォ・・・
俺一回誰かに教えて貰ったような夢を見たンだが・・・誰だったんだろォか・・・・」

幽香
「？・・・相変わらず美味しいわね・・・・」

拓也
「そりゃ良かった・・・・つゥ訳で・・・・」

幽香
「隣で寝かして貰うわね」

拓也
「うン・・・・眠いから相手は出来ンぞォ？」

幽香
「抱き枕にさせて貰うわ」

拓也
「それはちっと止めてほしいンだがなァ・・・まァ、いいかァ・・・・」

夜

拓也
「ン～・・・幽香・・・起きろォ・・・・」

幽香
「ん・・・おはよう拓也・・・・」

拓也
「うィ・・・おはようさン・・・じゃ、飯作ってくるわァ・・・・」

さて、何にしよォかねェ・・・

一つはミネストローネ、もう一つは

チルノ
「邪魔するわよ！」

拓也
「邪魔すンなら帰れ・・・？・・・・」
チルノ

チルノ
「今何か嫌なこと言われた気がするわ・・・」

拓也
「ンなコトねェ・・・

ンでなンのよォだァ？暇つぶしなら霊夢ンとこ行きやがれェ」

チルノ
「嫌よ！」

拓也
「ンでだァ？」

チルノ
「何でか分からないけどあそこに行くと木にぶら下がってるんだもん！」

拓也

「・・・本当に？（マルキュー）でよかったなァ・・・・」

チルノ
「？」

さて・・・・餃子が出来た・・・ンだが・・・・

拓也
「何故テメェが此処にいやがるンだァ？」

幽香
「良いじゃない・・・私たちの子供みたい・・・・
うふふふふふふふふふふふふふふふふふふ（ｒｙ」

拓也
「（ゾクッ）家主がいいっつゥならいいンだがよォ・・・・」

チルノ
「アンタって・・・・」

拓也
「ンだァ？」

チルノ
「何でもないわよ・・・（ボソッ）ガンバってね・・・コイツのことが好きな女子達」

拓也
「はァ・・・オマエらしくもねェなァ・・・・」

チルノ
「五月蠅いわね！！」

食事終了

拓也
「幽香ェ・・・・・」

いきなりなンだってェ？

コイツ・・・俺がちっと顔近づけただけで・・・・ボンッてなったンだよォ・・・・

さすがに此処まではねェだろォ・・・・

チルノ
「鈍感ね・・・・

明日は勝負しなさいよ！！！」

拓也
「おぼえてたらなァ・・・・」

チルノ
「なら覚えてなさい！！！」

拓也
「・・・・・円周率は？」

チルノ
「え～と・・・・3．3333333333333333・・・・？」

拓也
「それは10÷3だぞォ・・・・」

チルノ
「・・・／／／覚えてなさい！！！」

拓也
「おゥおゥ・・・」

・・・春ならもっと違うのこねェかァ？

なンかリリィとかさァ・・・まァ、いいンだがよォ・・・

リリィ

———————————————————————————————————————

1. 第八話 ↑

2. 新規

3. 新規

———————————————————————————————————————

1. 第?話 ↑

2. 新規

3. 新規

———————————————————————————————————————

「・・・私の出番わ？」

え～と・・・じか―ピチューン！―

第?話（後書き）

さて、今回は特に言うこと無いので

次回もよろしくお願いします！

ではでは～w

第十話

――――――

１９９８年　春

拓也
「はァ・・・これぞ正しく春うららかァ・・・なァ？霊夢」

霊夢
「そうね～」

―ずず～―

拓也
「先月さァチルノ来て覚えとけって言われたンだがよォ・・・
結局来なかったンだよォ・・・」

霊夢
「私もよ・・・」

―ずず～―

拓也・霊夢
（（話題がない・・・））

魔理沙
「遊びに来たぜ～！！」

拓也
「よォ・・・」

霊夢
「素敵な賽銭箱はあちらよ」

魔理沙
「つれね～ぞ！拓也！紹介したいヤツがいるんだぜ！」

拓也
「夫かァ？」

魔理沙
「恋府『マＳ」

拓也
「すまねェ・・・ンで誰だァ？」

アリス

「へぇ・・・此処が博麗神社ね・・・」

魔理沙
「アリス！来てくれ！！」

拓也
「アリスっつぅのかァ・・・・よろしくなァ」

アリス
「ええ、よろしく頼むわ」

拓也
「さっきまでずっとお茶のんでたからなァ・・・」

魔理沙
「用は暇だったんだな」

霊夢
「そうね」

―ずずず～―

拓也
「あァ～お茶がうめェ・・・」

アリス

「変わらないわね・・・さっきと同じになってるじゃない・・・」

拓也
「ちっと待ってなァ・・・」

―ゴソゴソ―

拓也
「ほれ・・・哀川さン特製あくせられーた人形」

魔理沙
「私にはねぇのか？」

拓也
「そんなに数つくってねぇケド、霊夢も魔理沙もほれ」

霊夢
「ありがとう・・・大切にするわ」

魔理沙
「私もだぜ！」

拓也
「そう言ってもらえると有り難いぜェ」

アリス

「・・・すごいわね・・・芸が細かいわ・・・」

拓也
「あンがとォな」

魔理沙
「お前に似てるな～」

霊夢
「瓜二つね」

拓也
「そりゃ、別世界の俺だしなァ・・・」

魔理沙・霊夢・アリス
「「「！？」」」

拓也
「言ってなかったなァ・・・
俺ってばよォ・・・二つの記憶をもってンだよォ・・・」

魔理沙
「・・・転生者？」

霊夢
「ホント？なら・・・閻魔が来て良いはずなんだけどね・・・」

拓也
「違うぜェ」

アリス
「・・・ならどうして？」

拓也
「言うなら、そォだな・・・別の可能性の記憶を持ってる感じだなァ」

アリス
「ふ～ん」

拓也
「さて、俺は飯でも作ってくるわァ」

霊夢
「行ってらっしゃい」

霊夢
「そう言えば拓也は元々人間だったらしいわね」

魔理沙

「外来人とも聞いたぜ」

アリス
「そうなの？」

霊夢
「ええ・・・」

魔理沙
「外ではどうだったんだろうな？」

アリス
「聞いてみる？」

拓也
「飯出来たぞォ！」

霊夢・魔理沙・アリス
「「「あの・・・」」」

拓也

「どうしたァ？」

霊夢
「外ではどうだったか聞かせてくれる？」

拓也
「ン？おやすいご用だがァ・・・・・

そうだなおもいだすのは・・・最後のやり取りか・・・」

回想見るのはメンドイから・・・

れっつＧＯ・・・

見なくて良いぞォ？見たことあるならよォ

―回想―

拓也
「ハァ・・・ハァ・・・俺も年貢の納め時かねェ・・・」

真っ赤に服が染まった少年・・・哀川拓也こと俺だァ・・・

優奈
「っ・・・！頼む！生きてくれ！！」

横で叫んでるヤツ・・・コイツが上条優奈・・・大切だった（・・・）モノだ・・・

拓也
「ンなこと言ってもなァ・・・俺ってばさァ・・・もォ殆ど眼が見えてねェンだよ・・・

まァ・・・こンな俺でも大切なモノを最後まで持っていけたのは一重に優奈のお陰なン

だぜェ？オマエが居なかったらよォ・・・俺は多分ガキのままだったと思う・・・」

優奈
「分かった・・・分かったから！もう・・・喋らないでくれ・・・・」

拓也

「泣きそォな顔すンなよ・・・」

優奈

「・・・・一生の・・・・一生に一度のお願いだ・・・・

死なないでくれ・・・・」

拓也

「ッハァ！ンな願いは駄目だぜェ・・・

多分もゥアイツもヤバイ筈だァ・・・なァ・・・優奈・・・

最後くらいさ・・・俺にも・・・セイギノミカタを張らせてくンねェか？」

優奈

「嫌だよ・・・拓也・・・貴方とずっと一緒に居たいよ・・・」

拓也

「・・・・そォだな

俺も・・・・ずっと一緒に居たかった・・・

すまねェ・・・・」

―トスッ―

拓也
「さァてと・・・最後の最後の大一番だァ・・・
失敗は許されねェぞ哀川拓也(セイギノミカタ)！やれる・・・
確かにフィアンマには―反射―もナニも通じねェ
・・・だからどうした？
俺のこの力は自分(テメェ)の大切なモンを守るために使うって決めたンだよ・・・」

フィアンマ
「っぐ・・・貴様ぁ！！」

拓也
「フィアンマ・・・・ここから先は一方通行だ・・・
とっとと元の居場所《世界》に引き返しやがれェ！！！！！」

―回想終了―

霊夢
「・・・・拓也は寂しくなかったの？」

拓也
「そうだねェ・・・寂しい・・・なんて比じゃねェなァ・・・」

霊夢
「そう・・・」

魔理沙
「優奈って人辛かったんだろうな・・・」

アリス
「それ以上に拓也さんも辛かったでしょうね」

拓也
「最後は大切なモノを守りたい一心だったからなァ・・・

因みに、転生者で間違いではねェンだがよォ、ゼウスに転生させて貰ったからなァ・・・」

霊夢
「そう・・・」

――――――

2. 新規

3. 新規

――――――――――――――――――――――――――――――――

続くぜェ・・・・

第十話（後書き）

今回も報告は特になしです！

次回もよろしくお願いします！

ではでは～w

第十一話

――――――

さて前回のあらすじ・・・

1．お茶を濁す

2．一方通行人形（第二期）をあげる

3．昔話をする

で今回は前回から数ヶ月経って夏になったぜェ・・・

あ、皆知ってるかァ？昔の春ってよォ1月～3月なんだぜェ・・・

幻想郷は中身は昔のままだから今6月なンだが夏なンだぜェ・・・

さて、本編へレッツＧＯ！

１９９８年　夏

拓也
「・・・なァ・・・・」

幽香
「なにかしら？」

拓也
「暇なンだが・・・ちょっと散歩してきていいかァ？」

幽香
「ん～・・・早く帰ってきなさいよ？」

拓也
「うィうィ・・・ンじゃ・・・行ってくるぜェ・・・」

さてさて・・・適当にとんでくかァ・・・

・・・ちょっと待てよォ・・・俺元の世界に帰れるンじゃねェかァ？

『森羅万象の向きを司る程度の能力』になったし・・・アイツの能力を使わなくてもでれンじゃ？

・・・アイツが幻想入りさせたときに、俺を外に出すようにさせたら・・・

ヤベェ・・・俺ってば頭良いじゃン！

よし・・・まず此処をつかんで・・・引っ張り出すゥ！

拓也
「フィィィィッシュ！」

紫
「きゃあああああ」

拓也
「ハロォ・・・なァ・・・実験したいから一人誰でも良いから幻想入りさせてくンねェかァ？」

紫
「・・・何よ急に・・・対価を払ったらいいわよ？」

拓也
「対価ァ？」

紫
「そうね・・・私の夫になりなさい」

拓也
「・・・・・・・・・ン？なンて言いましたかァ？」

紫
「恥ずかしいから何度も言わせないで／／／／
だからね？私の夫になってちょうだいって言ってるの」

・・・まじで？ちょっ！？おま！？ヤベェ・・・

俺ってばよォ・・・・何時フラグ建てたンだぜ！？

まじで？え？あれ？ヤバイ！？幽香に知れたら・・・慧音に知れたら・・・妹紅に知れたら・・・

ヤバイヤバイヤバイ・・・駄目駄目・・・あァオワタもう駄目・・・

拓也

「・・・俺が何をしたァ？」

紫

「・・・全く無自覚なのね・・・

一回天魔に挑みに行ったじゃない・・・そのときに助けてくれたとき・・・」

―回想―

拓也
「よォ・・・ゆかりン・・・大丈夫かァ？」

紫
「ッ・・・はぁはぁ・・・どう・・・やったら・・・大丈夫に・・・見えるのかしら？」

天魔
「何者じゃ貴様？」

拓也
「ン？俺かァ？

・・・俺は通りすがりの悪党だぜェ・・・！」

紫
「・・・やめときなさい・・・私が手も足もでなかったのよ？」

拓也
「・・・はァ・・・俺はなァ？大切なモノを守る為ならよォ・・・命だって捨ててやるって決めたンだァ・・・お前は既に大切なモンにはいっちまってなァ・・・

残念だったなァ・・・俺はテメェを守るぜェ！」

―回想終了―

・・・アァアアアアアアア！？

何かやっちまったよォ・・・！！

俺ってばよォ・・・俺ってばよォ・・・・ウガァ！！！！！

拓也
「・・・そりゃマジで言ってンのかよォ・・・」

紫
「・・・ええ本気よ・・・」

拓也

「・・・俺には既に他にも大切なモンがあるンだ・・・
お前はそれでもいいのかァ？」

紫
「ええ・・・何時か振り向かせて私しか見れないようにしてあげるから」

拓也
「・・・ドイツもコイツも俺なンかの何処が良いンだかァ・・・」

紫
「自分を卑下しないでくれる？好きになった私たちまで卑下することになるわよ？」

拓也
「はァ・・・ンで、連れてきてくれるかァ？
マジの一般人だぜェ・・・・下手に強いのだったらメンドクセェからなァ」

紫
「じゃ、いくわよ」

―クパァ―

此処だ！！

拓也
「よっしゃ成功！」

紫
「んな！？」

拓也
「ちょっと行ってくらァ・・・・」

―――――――

次は現実世界の・・・に行くぜェ！

トゥー　ビー　コンテニュー

第十一話（後書き）

ニコ動の作業ＢＧＭ聞きながらの更新ですｗ

さて、ボーカロイドが最高なけふこの頃・・・

でもＵＴＡＵも聞いてみてはどうですか？

ちょっとはまっちゃったので宣伝をｗ

では次回もよろしくお願いします！

ではでは～

第十二話

――――――

ポ〇モンだったら面白いンだがなァ・・・・

何処から連れてこようとしたかによるよなァ・・・

取り敢えず走り回るかァ・・・

・・・分かったことがよォ・・・

此処・・・学園都市だわァ・・・しかも・・・なんか小さい当麻と会ったという・・・

ホンマまさかやわァ・・・

なンでやろなァ・・・

ッハ！？俺ってばビックリしすぎて大阪弁喋ってたぜェ・・・・

でもあれだなァ・・・・まさかだったわァ・・・

出たところが此処ってよォ・・・
まァ、もォ帰るしいいかァ・・・

・・・どうやって帰ればいいンだァ？
ありゃァ？・・・俺としたことが失念してたぜェ・・・・
取り敢えず・・・何かニコニコしてやがる『御坂　美鈴』をどうにかしなくちゃなァ・・・

拓也
「おィ・・・なンで通せんぼしてやがンだァ？」

美鈴
「いや～・・・家が無い子を外に放っておく訳にはいかないのよ」

拓也
「だ・か・ら無いンじゃ無くて帰れねェだけなンだよォ！
軽い家出なンだからよォ、大人なら放っておきやがれェ！」
美鈴
「いや～美琴ちゃんも喜んでるんだから簡単には返せないよ
・・・家に帰れないしご飯もないんでしょ？私に任せなさいな！」

なンかもォなに言っても・・・こういうときの紫じゃねェのかァ？
と、思って周りをゆっくり見回してみるンだがァ・・・・
・・・あ・・・ジトーって幽香と妹紅と紫が見てやがるなァ・・・

拓也
「・・・ほれ・・・・」

美鈴にあっちへ向けと指で向こうに居る三人を指した

美鈴
「家族の人達かしら？」

拓也
「あァ・・・・」

でも、なンで皆外の服を着てやがンだァ？

まァ・・・後で聞くかァ・・・

俺金持ってるし最悪払うかァ・・・

幽香
「拓也くん？・・・・クスクス

駄目じゃない・・・一人でどっかに行っちゃったら・・・・クスクス」

妹紅
「そうだよな・・・・勝手に行っちゃったからビックリしたんだよ？クスクス」

紫
「（後で覚えときなさい？勝手に私の能力を応用しやがって）クスクス」

拓也
「・・・」

あァ・・・・なンか寒気が・・・

今日辺り死にそうな予感がやべェ・・・

ポケ〇ンに逃げてェ・・・ラルトス・・・帰ったらお前一人で殿堂入りしてやるからなァ・・・

拓也
「っつゥ訳だから・・・ン」

―ガシッ！―

拓也
「・・・なンだァ？」

美鈴
「いえ、今そっちに行かせたら殺されそうな気がして・・・・」

拓也
「・・・多分間違いではねェだろォなァ・・・・」

美鈴
「コレが巷で有名なヤンデレってヤツね・・・・・！」

拓也
「・・・まァ、今までも大丈夫だったンだから大丈夫だろォよォ・・・・多分」

美鈴
「・・・危なかったらまた来なさいよ・・・・」

拓也
「ン・・・・」

・・・・おいしくいただかれました　まる

はァ・・・・

――――――――――――――――――――――――

1. 第十一話 ↑

2. 新規

3. 新規

――――――

第十二話（後書き）

現実・・・・取り敢えずパラレルドワールドと言うわけで・・・・

とある魔術にしましたw

今回も特に報告なんて無いので後書きは特にはないですw

さて、次回もよろしくお願いします！

では！

第十三話

ーーー

１９９９年　春

拓也
「はァ・・・・また春かよォ・・・・・
異変でも起きりゃ俺にも仕事くンのになァ・・・・ハァ・・・・」

霊夢
「仕事したいの？」

拓也
「暇じゃねェか？・・・・本当になにもねェなァ・・・・」

魔理沙
「きてやったぜ～霊夢に拓也～！」

霊夢
「・・・いらっしゃい」

拓也
「ン～、いらっしゃい～」

魔理沙

「！？」

拓也
「ン？どうしたンだァ？」

霊夢
「はやく座りなさいよ～」

魔理沙
「なんか今日可笑しいんだぜ！？」

拓也
「・・・まァ、暇すぎて平和ボケしてるだけだからなァ・・・」

霊夢
「・・・そういや拓也、外の世界にいったらしいわね～」

魔理沙
「拓也もヤンチャなんだな～」

ヤンチャってよォ・・・

残念だったが、良い思い出なンか無かったンだよなァ・・・

最終的に喰われたし・・・泣いていいと思うレベルだぜェ・・・全くよォ・・・

拓也
「ヤンチャ・・・で済ンだら良かったンだがなァ・・・」

霊夢
「・・・触っちゃいけない感じね・・・」

拓也
「あんまり触ンないでくれェ・・・」

魔理沙
「そう言えばスペルカードの勝負・・・拓也とはしたことなかったよな？」

拓也
「ン・・・無かったぜェ」

魔理沙
「・・・ならしよォぜェ！」

拓也
「・・・分かった・・・暇だしなァ」

霊夢
「なら、審判するわね」

拓也
「ン・・・」

魔理沙

「オッケーだぜ！」

――――――

次回は戦闘かァ・・・

ちょっと本気で行くかァ・・・

トゥー　ビー　コンテニュー

第十三話（後書き）

取り敢えず今日からは、桜才戦記を優先して更新します・・・

次回もよろしくお願いします・・・では！

第十四話

――――――

拓也
「おォと・・・
ンじゃはじめっかァ・・・初手はそっちにやンよ」
魔理沙
「分かったぜ・・・恋符『マスタースパーク』！」
ーズザザザー
拓也
「初手は普通小手調べだろォ・・・普通・・・反射『一方通行』！」
魔理沙
「ンな！？」
霊夢
「卑怯ね～そのスペル・・・」
拓也
「残念だがコレが能力なモンでなァ・・・」
魔理沙
「くっそ～・・・こうなったら・・・魔砲『ファイナルスパーク』
！！！」

拓也
「電離『プラズマボール』！！」

魔理沙
「ハァァァ！？なんでファイナルマスタースパークが止めれんだよ！？」

拓也
「年期がちげェンだよ・・・」

魔理沙
「うわぁあああ！？」

意外とあっけなかったな～・・・
もうちょいかかると思ってたンだけどなァ・・・
ハァ・・・まァいいかァアイツは未だ成長期だしなァ・・・

拓也
「なァ・・・魔理沙・・・魅魔知ってっかァ？」

魔理沙
「うん・・・一応・・・」

拓也
「住所教えてやっから勉強してこいや・・・
修行してからもっかいやろうぜ・・・お前は強くなンだろォからな・・・」

魔理沙
「・・・うん！」

霊夢
「審判関係無かったわね・・・
思いっきりワンサイドゲームだったしね」

拓也
「まァいいじゃンか・・・アイツの成長になンだしよォ・・・」

―ズズズズズ―

拓也
「あァ・・・暇だ」

霊夢
「そうね・・・・」

拓也
「はァ・・・・」

―ズズズズ・・・・―

拓也
「はぁ・・・久々に英霊と戦いたいなァ・・・・」

霊夢
「何別次元のレベルの話してんのよ・・・」

―ズズズズ・・・・―

拓也・霊夢
「「っほ・・・」」

拓也
「ンでどうすンだァ？」

霊夢
「暇だし永琳トコに逝く？」

拓也
「そうすっかァ・・・」

1. 第十三話 ↑

2. 新規

3. 新規

1. 第十四話 ↑

2. 新規

3. 新規

えーりんトコ行くかァ・・・

トゥー　ビー　コンテニュー

第十四話（後書き）

コレは以前に書いていたのでとうこうでしww

第十五話

――――――

「空が気持ちいいなァ・・・」

霊夢
「空を飛ぶのが・・・でしょ？」

・・・・はァ・・・・
あァ・・・それと・・・アイツ達（幽香さんとか）とは書かれて無いけどちゃんとあってるぜェ？

拓也
「迷いの竹林何処だっけ？」

霊夢
「そのうち見つかるんじゃない？」

暇だし前回までのあらすじ・・・
魔理沙を倒して、暇だからえーりんに会おう！
・・・前回ほとんど内容がなかったなァ・・・こうやってみると・・・
・
駄猫ェ・・・
・・・おォ・・・見つかったなァ・・・
・・・なンか眠いなァ・・・

拓也
「あァ・・・妹紅いるかなァ？」

妹紅
「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃじゃじゃ～ん！」

拓也・霊夢
「「・・・」」

妹紅
「ゴメンだって・・・お願いだから黙らないで・・・
久々だから・・・目立ちたかったんだよ・・・お願い黙らないで・・・」

拓也
「・・・うン・・・まァ・・・分かってるよォ・・・」

霊夢
「・・・大丈夫よ・・・」

妹紅
「・・・その間はなんなんだ！！」

拓也
「だって・・・」

拓也・霊夢
「「なァ？／ねぇ？」」

妹紅
「畜生ぉおぉぉおおおおお！！」

―妹紅さんの機嫌が直るまで・・・カット―

妹紅
「よし・・・なら連れて行くぞ」

拓也
「あ、あァ・・・」

霊夢
「あ、有り難うね・・・」

疲れた・・・
本当に疲れた・・・
機嫌直すの面d・・・ゲフンゲフン・・・疲れた・・・
はァ・・・

次こそ・・・何とかなってほしィなァ・・・

——————————————————————————

1. 第十四話 ↑

2. 新規

3. 新規

——————————————————————————

1. 第十五話 ↑

2. 新規

3. 新規

――――――――――――――――――――――――――――

次こそえーりんトコに行けるかなァ・・・

トゥー　ビー　コンテニュー

第十五話（後書き）

何というか・・・・内容無かったね・・・
駄猫さん的にはＰＣ時間が欲しいです・・・
あと駄猫さん的には２４時間から３６時間になって欲しいです・・・
時間が足りません・・・テストもあるし・・・
・・・よし！てなわけで今回は十五話でした！
グチは失礼しました・・・結構あれでしてｗ
次回は（。∀。）ｏ彡。えーりん！えーりん！！ですｗ
では！

第十六話

――――――

ン？あ、どォも哀川拓也だ
最近どォも怠さが抜けないンだよなァ・・・
ま、本編とは関係無いンだがな

拓也
「なァ・・・妹紅ォ」

妹紅
「ん？なんだ？」

拓也
「いや、未だ着かないのかって思ってなァ・・・」

妹紅
「ん・・・あと、ちょっとだぞ」

霊夢
「空飛んだ方が早くない？」

妹紅
「・・・罠にかかったりするぞ？」

霊夢
「感でなんとかなるわよ」

拓也
「感でなンとかなるのはお前だけだと思う」

霊夢の感は異常だろ・・・・
まるで、某三下のアドバイスや某十代目の超直感や

某聖杯戦争の大食い王(騎士王)の直感スキルだなァ・・・
・・・あ、そう言えば前幽香に、アナタのうっかりスキルはすごい
わねっていわれたンだが・・・
もしかして・・・伝染した？

妹紅
「何考え込んでるんだ？」

拓也
「・・・いや、自分のうっかりレベルがどれぐらいなのか知りたい
なって思ってなァ・・・」

霊夢・妹紅
「「かなりだと思う」」

拓也
「・・・」

妹紅
「え！？いや、ゴメン！お願いだから縄は出さないで！」

霊夢
「何着々と準備進めてるの！止めてって！！」

―拓也さんの機嫌が直るまで・・・カット―

拓也
「着いたみてェだなァ・・・・」

妹紅
「やっとだな・・・・」

霊夢
「本当にね・・・・」

輝夜
「いらs・・・・」

妹紅
「私は帰る」

輝夜
「あら？逃げるのかしら？」

―プチッ―

妹紅

「私の仕事は連れてくることだけだから」

・・・おいおい、あンま調子乗って妹紅ブチギレさせンなよ・・・・？

俺でもこえェンだぞ？バーニング妹紅・・・

想像するのは東方人形劇のE妹紅のグワァァァァてなってるヤツだな

永琳

「あら、拓也じゃない」

拓也

「あ、どォもです」

俺は永琳さンにはタメで喋れない・・・てか、しゃべったら駄目な気がする

なンでだろォな？・・・分からねェ・・・天の意思ってヤツかァ？

ま、どっちにしろ下手なこと言って薬漬けはいやだしなァ・・・

拓也

「・・・・また、キレさせたンだな輝夜姫」

永琳

「そのようね

それで、今日はなにをしにきたの？」

霊夢

「何もすることが無かったから来たのよ」

拓也

「俺的には最近どォも怠さが抜けないンで、リボビタ〇Dみたいな

のが欲しい」

霊夢

「・・・アンタは目的があったのね・・・」

拓也

「ン・・・まァな」

1. 第十五話 ↑
2. 新規
3. 新規
1. 第十六話 ↑
2. 新規
3. 新規

次の次ぐらいに季節を進められるかな～・・・ｂｙ駄猫

トゥー　ビー　コンテニュー

第十六話（後書き）

よし、やっと更新できた・・・
今日学校休みで良かったぁ・・・・
駄猫さん的にも有り難い・・・
では、次回もよろしくお願いしますね～

第十七話

――――――

ン？あ、どォも哀川拓也だァ
怠さが全く抜けてくれねェ・・・最悪倒れるかもなァ・・・
元気ドリンコでも良いンだけどなァ

拓也
「なァ、霊夢ゥ・・・」

霊夢
「何かしら？」

拓也
「竹林燃えてねェかァ？」

霊夢
「燃えてるわね・・・」

拓也
「永琳さン、キレるンだろォなァ・・・
取り敢えず、火消すかァ・・・身体は激しく怠ィンだけどなァ・・・」

霊夢
「ムリは止めときなさいよ？」

拓也
「うィィ」

―バサッ・・・ズガン！―

拓也

「ケケケ、お二人さン・・・早く止めないと・・・吹っ飛ばしちゃうぜェェェェ！！」

妹紅
「ちょっ！？」

輝夜
「にゃああ！？」

・・・さァてとォ・・・俺は軽くＯＨＡＮＡＳＨＩでもすっかねェ・・・
ンじゃァ・・・いっちょ決めますかァ

拓也
「少し・・・頭冷やそォかァァァァァァァァ！！」

妹紅
「ンギャ！？ゴメンゴメン許してぇぇぇぇ！」

輝夜
「無様ねもｋ・・・」

―シュー・・・―

妹紅
「輝夜ァァァァァァ！！畜生・・・輝夜ムチャしやがって・・・」

拓也
「お次はァ・・・妹紅クゥゥゥゥゥン・・・テメェの番だァ・・・
ようやく消火もできたしなァ・・・えんｒｙ・・・」

―バタン―

妹紅

「・・・へ？」

永琳

「拓也・・・薬出来たって・・・あれ？」

―――――――

・・・ココどこだァ？
真っ白なンだが・・・もしかして俺死ンだ？
・・・ううん、死んでないよ・・・
唯、能力が進化しようとしてたところで体調悪化していたのに、
翼を出してただいまＰＣでいう処理落ち中なんだよ
・・・テメェは誰だァ？
僕かにゃ？僕は・・・通りすがりの猫又亜種だよ
所謂世界の傍観者だね・・・主人公君♪
ま、君には後二、三ヶ月この空間に居て貰うけどね♪
・・ハァアアアアアアアア！？
トゥー　ビー　コンテニュー

第十七話（後書き）

と言うわけで投稿です♪

・・・男がやってもキモイだけですね・・・

さて、ネタバレするとこの世界の傍観者ちゃんは全ての世界で何時か出ますよ

と言うわけで、次回も頑張ります・・・では！

第十八話

――――――

ン？あァ・・・どォも哀川拓也だぜェ・・・
いや・・・さ・・・猫又だっけかァ？アイツ・・・フィアンマナニソレ美味しいの？状態なンですが
・・・敢えて言おう・・・巫山戯るなァ！！
つか、戦闘力ドラゴン○ールGTのゴ○ータ4並じゃねェか！！
死ンじまうぞォ！？ンだァ？日光もねェのに光を害に変えて攻撃ってどォなンだァ！？
メルヘン野郎（改）ですかァ！？コンチクショー！！

やっと目が覚めたんだね♪

巫山戯ンなよ・・・

其れより、もうすぐ君の能力も開花するし目が覚めるから・・・

・・・何時だァ？

う～ん・・・後20秒だね

はァ！？つか・・・・えェ！？

ラスト5秒だよ

ちょ、おま！？

と言うわけで・・・いってらしゃ～い♪

ハァアアアアアアアアアアアアアアアア！？！？

１９９９年　夏

拓也
「ハァアアアア！？・・・・て・・・・」

霊夢
「今日もお見舞いにき・・・・・え？」

拓也
「あ、ども」

霊夢
「・・・た、え？？？？」

拓也
「無事帰って（？）きたぜェ」

霊夢
「拓也ぁ・・・心配させないでよぉ・・・・」

拓也
「ゴメン・・・・」

妹紅
「え？・・・・拓也！？」

拓也
「あ、ども（二回目）」

妹紅
「心配させんなコンチクショー！！」

霊夢
「・・・倒れさせたのアンタ達の癖に・・・・」

妹紅
「ぐ・・・・」

・・・倒れたのは能力に負荷かけ過ぎたからなンだがなァ・・・
え？空白の期間何してたンだってェ？猫又と戦闘してたンだよ・・・・
所謂修行だなァ・・・もォ思い出したくはねェけどな・・・
何回死にかけたことか・・・
ま、其れのお陰でようやく『幻想郷無敵』っていう称号がもらえたンだがなァ
あの猫又に

幽香
「あら、起きたのね」

拓也
「お、おゥ・・・・・」

あれ？笑顔・・・だよね？何でかなァ・・・怖いンデスケド・・・

幽香
「・・・女の臭い・・・・」

拓也
「・・・えェと・・・幽香サン？」

本気でこの人怖いわ！！目に光りがねェよ！

幽香
「・・・アナタの戦闘力が異常に上がってるような・・・」

拓也
「トイレ行ってきますゥゥ！」

・・・えェ・・・臭いつくはずねェだろ・・・
しかもつくとしたら俺の血の臭いもしくは・・・動物臭？

ーガシー

幽香
「久しぶりに・・・・殺りましょうか・・・クスクスクスクス」

拓也
「嫌だわァ！！身体がしんどいわ！」

嘘ですがねェ

幽香

「嘘でしょ？顔に書いてあるわ」

拓也
「・・・分かったよ・・・迷惑だろォし外でなァ」

幽香
「分かったわ」

―迷いの森―

拓也
「ン～・・・冷蔵庫にしてやンよ」

幽香
「・・・冷蔵庫？」

拓也
「あ、今の無しで・・・ンじゃァ・・・いつもの如く俺らしく行かせてもらうぜェ」

幽香

「スペルカードルールは無しで」

拓也
「・・・え？いいのかァ？」

幽香
「アナタの本気もみてみたいしね」

拓也
「了解っと・・・・ンじゃ、まァ・・・はじめっかァ」

幽香
「マスタースパーーーーク！！」

ーズン・・・ズガアアアアアンー

拓也
「反射」

ーキュインー

幽香
「っち・・・やっぱり面倒ね・・・反射だったかしら？」

拓也
「面倒だろォなァ・・・」

半分無意識でやってるしなァ・・・
木原クンの厨二寸止めパンチすら途中で反射やめれっから効かねェしなァ・・・

幽香
「なら・・・・！」

拓也
「寸止めパンチは効かねェよ・・・・」

幽香
「え？」

以前までの俺なら効いたンだがなァ・・・・

拓也
「デコピン！」

―パチン―

幽香
「きゃっ・・・・・む～・・・・・また勝てなかったわね・・・・・」

霊夢
「・・・・空気ね・・・・」

妹紅
「・・・・空気だな・・・・」

1. 第十六話 ↑
2. 新規
3. 新規
1. 第十七話 ↑
2. 新規

3. 新規

――――――――――――――――――――――

拓也
「そォいや、霊夢」

霊夢
「何かしら？」

拓也
「髪切ったンだな・・・」

霊夢
「えぇ・・・似合ってるかしら」

拓也
「おゥ、可愛いぞ」

霊夢
「・・・／／／」

トゥー　ビー　コンテニュー

第十八話（後書き）

投稿投稿・・・勉強しなくちゃなぁ・・・ハァ・・・
次回もがんばります！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1678v/

哀川くんの東方戦記

2011年11月27日15時53分発行